

監訳のことば

すべての「臨床家」が協働して「診断エラー」を回避するための学びを深めていきましょう。

この数年、臨床推論・診断学に関する良書が数多く出版されてきました。また、医学生・研修医のみならず、熟練医師においても、臨床推論・診断学に関する学習会や症例検討会が各地で開催されるようになってきています。これらによって臨床家の臨床推論・診断の能力はめざましく向上しているように思います。

しかしながら、おそらくすべての「臨床家」は診断エラーによってヒヤッとした経験をもっているはずで、残念ながら、診断エラーによって患者さんに不利益がもたらされてしまった経験も、すべての臨床家ももっているはずで、もしそのような経験のない臨床家がいたとしたら、その臨床家は自分が犯した診断エラーに気づいていないという非常に問題のある状況であるか、あるいは、本当の臨床の専門家が取り組むべき難しい臨床状況の中では診療しておらず、困難な意思決定の場面を経験することがなかった、ということではないかと思えます。

これまでの臨床推論・診断学の教育は、正しく診断できたプロセスに焦点が当てられることが多く、診断エラーについて議論されることは、あまり多くなかったように思います。すべての臨床家が経験している多くの診断エラーの情報は、あまり共有されることなく、失敗から学ぶことなくそれぞれの心の中にしまい込まれてしまっているのではないのでしょうか。診断エラーは高頻度に生じていることがこれまでの研究により明らかになっています。自分だけが診断エラーを経験しているということはありません。皆が診断エラーを起こしています。失敗からの学びは明日からの良質な診療のためにも最も重要な学習です。もっと診断エラーに焦点を当てた議論を行い、これまでとは少し違った側面から診療の質向上のための学習をする必要があると思います。このことは患者安全に貢献する最も重要な活動の1つのはずです。

欧米ではすでに認知心理学に基づいた診断エラーに関する多くの研究結果が蓄積され、診断エラーに対する先進的な取り組みがずいぶん進んできています。本書はこれらについて基本的な考え方が概説されている非常に有用なものです。臨床家はどのように推論を進めているか、どのように判断しているのか、その過程でどのような過ちを犯しやすいのか、これらがわかりやすく解説されており、医学生をはじめとした初学者にとっても理解しやすく、明日からの診療の質改善にすぐに役立てることができるようになってきました。これまで、欧米の多くの論文を集めて読みこなし、苦勞しながら臨床推論の過程で生じるエラーに関する理解を深めなければなりませんでした。本書を通

読することで一気に理解が進むと言えるでしょう。というわけで、ぜひこれを日本の多くの臨床家に紹介したいと思いました。

原書の序文に述べられているように、本書は医師だけに向けられたものではありません。臨床現場で意思決定に関わるすべての「臨床家」に向けて書かれています。患者さんの問題を、どのようにとらえ、どのように考え、どのように判断するのか、その際に生じる思考のエラーをどのように回避するのか、すべての臨床家とその基本的な概念と具体的方法を本書で学び、診断エラーに関する議論に参加し、理解を深め、診断エラーの回避のための教育活動を活発化させてほしいと思います。

本書は、診断プロセスの向上のために活発な活動を実践している意欲的な若手ジェネラリストのみなさんの多大なる貢献によって刊行することができました。彼女・彼らに心より感謝するとともに、彼女・彼らを含めた多くの「臨床家」のみなさんによって、今後、診断エラーに対する活発な取り組みが発展していくことに期待したいと思っています。

2018年7月

愛知医科大学医学部
地域医療教育学寄附講座・医学教育センター
宮田靖志